

特集論文

国際関係のなかのインド染織品
—東アフリカのカンガに関わるオランダのサンプル帳新資料から明らかにする
捺染布の展開

金谷 美和*

A Study on Indian Textiles from the Perspective of Global Relationships:
Investigation of Dutch Sample Books about the Kanga of East Africa

KANETANI Miwa

Abstract

Based on the examination of newly-discovered sample books of print textiles in Holland, the purpose of this paper is to demonstrate that the printed textile kanga, which has been widely used as women's dress in East Africa since the end of the 19th century, was created and developed through trade between India, Europe and East Africa.

I discussed in my previous paper how the designs of the early kanga may have originated from the textiles of western India. An examination of the sample books showed two points. Firstly, print companies in Holland collected textiles from British India. Secondly, they imitated and arranged the designs of textiles obtained from British India, and produced kanga for the East African market. The birth of the kanga is related with the development of printing technology encouraged by mass-produced cotton textiles and chemical dyes. In conclusion, I pointed out that mechanical printing techniques in Europe, which were developed via encounters with Indian textiles, returned to India and changed Indian fabrics and dress culture.

要旨

本稿では、インド染織品を染織研究にとどめず、国際関係論のなかで論じる視座を提示することを目的に、19世紀末から東アフリカで女性の衣服として用いられているカンガという染織品が、インド、オランダなどヨーロッパ、東アフリカの3つの極を舞台にした国際関係のなかで生まれたということを明らかにした。

筆者は別稿にて、初期カンガのデザインがインドの染織品に由来する可能性について指摘して

* 京都大学地球環境学堂（文化人類学、南アジア研究）

・2007、『布がつくる社会関係—インド絞り染め布とムスリム職人の民族誌』、思文閣出版。

・2008、共編著『はじまりとしてのフィールドワーカー—自分がひらく、世界がかわる』、昭和堂。

なお、本文中の写真はすべて筆者が撮影したものである。

いるが、本論では、オランダで新しく発見された、捺染会社が19世紀末から20世紀初頭に製作したカンガ関連のサンプル帳を調査し、次のことを明らかにした。①オランダの捺染会社が英領インドで染織品を収集していたこと、②オランダの捺染会社は英領インドで収集した染織品のデザインを模倣して、カンガを製造していたことである。カンガの誕生には機械捺染技術の発展があり、その背景には木綿布の大量生産、化学染料の発明が欠かせなかった。インド染織品は、ヨーロッパの近代的捺染産業誕生に寄与したが、機械捺染技術がインドに還流して、インドの衣装文化に変容を与えていることも指摘した。

1. はじめに

本稿では、オランダで新しく発見した、東アフリカで用いられた染織品カンガに関わる資料を検討し、ヨーロッパで製造された東アフリカ向けの染織品が、グジャラート地方を中心とするインド西部における木綿布の製造と交易を包含する、グローバルな人やモノの往還から生じたことを明らかにしたい。

経済史研究によると、19世紀のインド西部から東アフリカには木綿布が商品として輸出されていたことが明らかになっている。にもかかわらず、カンガなど模様染めの木綿布についてはほとんど言及がされていない。また、これまでカンガのはじまりや、ヨーロッパ製の機械捺染によるカンガが製造される以前の初期のカンガ製造・販売について、東アフリカ沿岸に居住していたインド商人の関わりや、木版捺染で製造されていたなどの指摘があったものの、それを明示する染織資料がなかったために判明しないことも多かった。今回筆者が調査を行った資料によって、カンガ初期の状況に光を当てることができると思う。

本稿で検討する資料は、オランダの木綿プリント製造会社が19世紀末～20世紀初頭に作成したサンプル帳であり、それに含まれていた以下の3つに分類される染織資料である。①英領インドで収集された染織品、②東アフリカで収集されたカンガ、③オランダで製造されたカンガである。

筆者はすでに、インドでの研究と、博物館に所蔵される染織品資料の調査をもとにして、初期カンガのデザインに見られる枠状のボーダーというデザイン構成がインド染織品に由来し、斑点模様はインド西部グジャラートの絞り染め布にあることを示している [金谷 2006; 出版予定]。今回調査した資料のなかに、絞り染めに由来するデザインのオランダ製カンガと、ボンベイで収集した旨が記された絞り染め布を新たに見いだした。オランダにおいても、インド染織品のデザインを模倣したカンガが製造されていたことが明らかになった。

本論の趣旨は、カンガの起源がインド染織品にあると示すことではなく、むしろ、すでに国際的な商品であったインド染織品がアフリカ向けの商品を生み出す「場」であったことを示すのが、主たる目的である。インドの木綿捺染布は、17世紀においてすでにヨーロッパに輸入されており、「インド熱」と呼ばれるような流行と需要をうみだしていた。さらには、技術やデザインが模倣され、

模倣がヨーロッパの木綿捺染布の発達をうながした。19世紀末～20世紀初頭におけるインド木綿捺染布の模倣は、東アフリカ向け商品の生産に伴って行われた。インド染織品が模倣されたのは、東アフリカにおいて当時すでにインド商人がインド製の木綿布の販売を行っており、インド木綿捺染布に対するなじみや好みが成立していたからであった。

筆者はこれまで、インド西部カッチ地方において染色に携わる職能集団の文化人類学的研究を行い、ローカルな社会関係内における染織品の製造―販売―使用を明らかにしてきたが、同時に、職能集団が、ローカルな生活世界の外に拡大した染織品の製造―販売にも携わってきたことについても論じてきた。グジャラート州カッチ地方では、20世紀初頭にはすでにザンジバルやモンバサへの移民がおり、造船、染色、商業などに携わっていた。職能集団は、グローバルな経済に直接関わるアクターでもあった。

2. 国際関係の中のインド染織品

インドは古来より卓越した染織技術で知られ、世界中に輸出されてきた。インドの染織品は、地域に埋め込まれた意味や用途、また交換価値をもっていると同時に、商品として異なる地域間を流通してきた。異なる地域に輸出されたインド染織品の多くは、貴重な財として、輸出された先で大切にされた。また、その貴重な染織品を得ようとして、現地でインド染織品が模倣されることもしばしばあった。

インド染織史研究は、Irwin による交易史に端緒を発するように、つねに国際関係の中で論じられてきた。Irwin らは、17世紀にヨーロッパに輸出されたインド更紗に注目した [Irwin 1955; Irwin & Schwartz 1966]。また、東南アジアに輸出されたインド更紗や緋布の研究 [Gittinger 1982; Guy 1998; 吉本 1996]、日本に渡来した南蛮更紗の研究 [小笠原 2008]、カシミール・ショールのヨーロッパでの流行についての研究 [レヴィ＝ストロース 1988]、欧米やアフリカに輸出された絞り染めハンカチーフとバンダナ・ハンカチーフへの展開についての研究 [Murphy & Crill 1991] などがある。また、エジプトのフスタート出土の更紗が、インド西部グジャラートの産であることが明らかになり、炭素同定により年代もほぼ特定されたことから、中東へのインド染織品の交易も明らかになりつつある [Barnes 1997]。

さらに近年では、インド洋交易におけるインド染織品についての論文集 [Barnes 2004] や、グローバル交易におけるインド染織品についての論文集 [Crill (ed.) 2006] などが出版された。それらの論文では、輸出されたインド染織品やインド国内で流通した特別な染織品について論じられるなど、広範囲にわたる地域でインド染織品が移動していたことが明らかになっている。

インドの染織品は、何世紀にもわたって世界中に輸出され、その多くは、伝わった場所で、稀少で貴重な財として扱われたり、社会の上位階層のあいだで贈り物の交換に組み込まれたりしてきた。一方で、グローバル経済におけるインド染織品の経済的重要性に注目した研究がある。本稿は、こ

れら先行研究の、交易品としてのインド染織品の重要性に対する関心を共有している。

本稿で論じるカンガは、貴重財としての染織品とは異なり、近代化のなかで拡大する消費需要に応えた染織品である。このような大量生産された染織品については、これまで染織研究では軽視されるくらいであったが、筆者は研究対象として重要であると考えている。

カンガのような染織品をうみだすことができたのは、捺染技術の展開であり、それを可能にしたのは、化学染料の発明と動力織機による木綿布の大量生産である。ヨーロッパにおける木綿製品の近代的生産形態をうみだしたことに与えたインドの木綿製品の影響は大きい。さらに、それがヨーロッパにおける大衆ファッションを可能にしたという指摘もある [ルミア 2006; Lemire 2003]。

機械による大量生産には、意匠が不可欠となる。産業技術が最初に展開したイギリスにおいて、近代的なデザインという概念が発展した。機械製品の表層に付加する装飾の創出のために、非ヨーロッパ世界の意匠に対する関心が高まった。インドをはじめとするアジア染織品の意匠を組み合わせることによって、デザインの大量生産が可能になり、新規な商品を求める消費意欲の旺盛な人々の求めによって移り変わる流行に応じることができた。大量生産されたために安価で、あらゆる階層の人々に手に入りやすい、大衆ファッションの素材として広く受容されたのである。このような捺染布による衣装は、社会階層に縛られた従来の衣装を変容させていったのである。

3. 捺染（プリンティング）技術の展開

捺染（Printing）とは、『染色加工の事典』によると、「捺染は字義からすれば印捺と染色の縮小語であって、印捺によって色材を被染布上に定置して模様の形を与え、その色材を染着させることによって染色物をつくる模様染めである」とあるように、模様染めの技術である。しかしそれだけでなく、「単色または多色を用いて、被染物の一部または全面を染色して、被染物の上に模様効果を発現する染色のうち、通常の浸染の技法によって行わないもの」[日本学術振興会繊維・高分子機能加工第120委員会編 1999: 265] とあるように、それまで浸染によっていた単色の染めをより少ない染料でおこなうことができるようになった技術でもある。

押し型や版を用いて、布に多色のデザインや模様を施すことは、紀元前4世紀にインドで始まっていたと考えられる [Wuff 1966: 224]。ヨーロッパでは、17世紀にインド更紗の藍のロウ防染法と茜の媒染技法が導入されたことを契機として、捺染産業が勃興した。18世紀後半にイギリスから始まった産業革命のなかで、ローラーを使ったローラー捺染とともに、動力織機による木綿布の大量生産がはじまると、ヨーロッパの捺染産業はさらに発展した [吉本 2006b: 16]。

ローラー捺染は、18世紀に英国で発明され、機械捺染のはじまりとされる。銅のロールに模様を彫刻し連続的に染織する捺染機を用いるものであり、模様染めを省力化、量産化することに貢献した。それまでの木版捺染や銅版捺染が、凸版を用いたものであったのに比べて、ローラー捺染は、凹版であることが技術の特徴であった。スクリーン捺染は、特定の部分に薬品で加工して染料や顔

料が浸透するようにしたスクリーンを布上にのせて、刷毛やローラーで色糊を擦り込む方法である。

捺染の機械化は、木綿の大量生産と合成染料の登場を背景にしている。合成染料は 1869 年頃からヨーロッパで開発された。天然藍の成分であるインディゴや、茜の成分アリザリンも合成された [内田 2007: 372–373]。

古来、布に多色の色をつけたり、模様をつけたりするには複雑な技術と手間がかかった。布に多色の色や模様をつける方法としては、先染めと後染めがある。先染めは、糸を染色してから織る方法であり、一本の糸をあらかじめ多色に染め分けておいたり、あるいは複数の色糸を組み合わせることで、多色の布ができる。織るときに経糸、緯糸の組み合わせ方を変化させることによって、より複雑な模様を生み出すこともできる。後染めとは、白い糸で織った布に、後から色や模様を染色でつけることである。布の上に染料や顔料で絵を描いたり、白く残したい部分に口ウをおいたり、布の一部を糸で括ってから、染めることで色の付いた部分とついていない部分をつくったりする。

そのようにして色や模様をつけられた布は、特定の社会階層に属する人々のあいだでのみ保持されたり、使用されたりするものであって、決してあらゆる階層の人々にひらかれた布ではなかった。捺染という技術で、より簡便に、少ない染料で布に色や模様をつけることができるようになり、さらに、捺染技術がローラー捺染のように機械化されたことで、多くの人が多色で模様のついた布を所有できるようになったと筆者は考える。

4. カンガとは

カンガという多色の模様染めの木綿布が、タンザニア、ザンジバル、ケニアなど東アフリカにある。大きさは約 150 センチメートル× 110 センチメートルであり、ムスリム女性が一般に二枚一組で使い、一枚は腰に巻き、もう一枚は頭に巻くことが多い。大柄な模様が特徴で、布の下部にはスワヒリ語の言葉がプリントされている。

カンガについての先行研究は主にスワヒリ語の文字に注目しており、コミュニケーションの媒体として用いられることが、カンガという衣装の特徴であると述べられてきた [Linnebuhr 1992; Zawawi 2005; Parkin 2005]。スワヒリ語の言葉は、愛のメッセージや格言などを表し、女性たちは、カンガの色柄もさることながら、スワヒリ語で書かれた言葉の意味を重視して、自分のために、また贈り物としてカンガを選ぶ。選挙の候補者の顔写真や記念行事の標語といった政治的なメッセージも頻繁にプリントされるように [Spencer 1982; Faber 2010]、カンガはメッセージを伝達する媒体として積極的に活用される衣装であるとされてきた。カンガの研究は、主に現代を対象にしており、ジェンダー研究の視点から女性の表現や実践の媒体としてカンガを捉えているものが多かった。

一方で、カンガが解放された奴隷によって受け入れられたものであることから、自由で近代的な都市住民の衣服としての歴史的意味が重要であると述べているのが、フェアとプレストホールドで

ある。19世紀末のザンジバルは、アフリカ大陸からの奴隷の積み出し港であった。内陸から連れてこられた人々が奴隷としてザンジバル島に集められて、船でアメリカ大陸に運ばれたのであった。

フェアによると、内陸部からザンジバルに連れてこられた奴隷達は着衣の制限があり、カニキと呼ばれるインド産の藍染めされた粗末な木綿布を身にまとっていた。1870年代後半、奴隷が解放されると、元奴隷だった人々は自由な衣装を着用するようになった。奴隷との結びつきが強かったカニキを脱ぎ、多色の布をまとうようになった。それら多色の布は、ザンジバルで染色された木版捺染布、あるいは輸入されたキタンビ (*kitambi*) という布であったとされ、その後カンガが着用されるようになったとされている。従って、フェアによるとカンガがうまれたのは、1900年頃から1910年頃であるという [Fair 1998: 76-77]。

プレストホルドによると、19世紀後半のザンジバルにおいて、服を着替えることは、新しい市民としての社会的地位の獲得であった。メインランドの奴隷や貧しい女性にとって、*ukaya* (頭に被る布)、*kisutu* (英国製の布にボンベイで染色した布) や *leso* (マンチェスター製の大判のカラフルなハンカチーフをザンジバルで縫いあわせたもの) を着ることは、近代都市ザンジバルに根をおろすというサインであった。さらに世紀末になると、*kanga* (染色と捺染がなされたインドの布) も同様の社会的意味を持って着用されるようになったという [Prestholdt 2008: 103, 136]。

実はカンガのはじまりについては判明しないことも多く、フェアとプレストホルドのカンガについての言及も、出典や根拠が明確でない。初期のカンガは、インド製であると言われたり [Prestholdt 2008: 103, 136]、木版捺染という技法で製造されたと言っていたと言われている [Hilger 1995: 44] が、その実態はこれまでほとんど明らかになっていなかった。フェアやプレストホルドの研究において、風俗写真を用いた初期カンガについての言及はあるものの、初期カンガの染織資料を基にした歴史研究はほとんどない [Nielsen 1979: 494]。これまで初期カンガの研究がほとんどみられなかったのは、その当時の状況を占める染織資料がなかったためであり、そのことから今回の調査で明らかになった資料は貴重であると言える¹⁾。

経済史研究によると、19世紀のインド西部から東アフリカには木綿布が商品として輸出されていたことが明らかになっている。1800年～1840年代には、カッチ地方のマンドヴィー港からインド産の木綿布が東アフリカに輸出されていたことが旅行者の記録にも記されている [Postan 1839: 12-14]。1850年代から1860年代にかけての約10年間はアメリカ産の未精練の木綿布 (メリカニ) が東アフリカの市場を独占したが、その後、1860年代からボンベイの繊維工場が生産した未精練の木綿布が東アフリカ市場に進出した。東アフリカ向け綿布の生産がボンベイの産業化を刺激し、インド洋におけるボンベイの中心的地位の確立に導いた要因の一つであったという [Prestholdt 2008: 84-85]。しかし、カンガなど模様染めの木綿布については言及されていない。

19世紀末から20世紀前半にかけて、カンガは、スイス、オランダ、英国の会社によって製造された。スワヒリ語の言葉をプリントすることは、20世紀初頭にモンバサの商人によって始められた

とされている。その後、カンガは日本（1950年代～1970年代）、タンザニア、ケニア（1960年代以降）、インド、中国などで製造された。

これまで明らかでなかったカンガの初期の状況、つまり、いつ頃から誰がどこでどのようにカンガを製造し、そのデザインはどのようなものであったのかについて、今回の調査で発見した資料から、ある程度明らかにすることができると考えている。

5. オランダの捺染会社とカンガ製造にいたる歴史

19世紀から20世紀初頭にかけて、アフリカ向け捺染布を生産・販売していたのはスイス、オランダ、イギリスなどヨーロッパの会社である〔吉本 2006b: 16–33〕。

本稿では、オランダで調査したサンプル帳を中心に述べる。オランダの捺染会社は、19世紀半ば頃からインドネシア向けの捺染布を製造していたが、のちにアフリカに市場を拡大していった。

筆者の調査で判明しているオランダの捺染会社は4社あり、表1で示すとおりである。このうち現存するのは、フリスコ社のみである。最も古い会社は、1830年創業のハーレム綿布会社（創業時の社名は *Previnaire*）である。ハーレム綿布会社は、1852年にジャワ・バティックの模様を模した捺染布を製造することに成功し、インドネシア向けに販売した最初の会社である。また、西アフリカにおいてジャワ・バティックの需要があったことから、ジャワ・バティックの模様を模した捺染布の販売を西アフリカで始めたのもこの会社であった〔Nielsen 1979: 473–474〕。

表1

プリント会社名	操業期間	所在地
Van Vliissingen（現在の社名は Vlisco）	1846年 – 現在に至る	Helmond
Kralingesche Katoen Maatschappij （略称 K.K.M.）	1882年 – 1932年	Rotterdam
Leiden Katoen Maatschappij（略称 L.K.M.）	1830年代 – 1922年	Leiden
Haarlemsche Katoen Maatschappij （略称 H.K.M.）（創業時は <i>Previnaire</i> ）	1830年 – 1922年	Haarlem

フリスコ社は、ヘルモントで1846年に創業され、現在もオランダの会社で唯一アフリカ向けの捺染布を製造している会社である。フリスコ社も最初は、インドネシア向けの捺染布を製造し、アフリカ向けに生産を転換していった。インドネシア向けの捺染布を製造するきっかけは、フリスコ社の創業者である *Pieter Fentener van Vliissingen* の叔父が、インドネシアのバタビアに砂糖のプランテーションを持っていたことによる。

インドネシアのジャワ島では、宮廷内や宮廷の関係する工房でバティック（ロウケツ染め）の染織品が作られていた。当時、型を用いたバティックの製造はまた行われておらず、ロウ描きのためのチャンティンと呼ばれる銅製の道具を使って、模様を防染するためのロウを布においた後、藍などの天然染料で染色するという、型を用いるよりも手間のかかる方法で模様染めをほどこした染織

品であった。バティックはそのために高価な染織品であり、ジャワ王室の王族や貴族、その従者たちなど社会の上層階層に着用が限定されたものであった。フリスコ社の社史によると、創業者の叔父は、このバティックを、低価格で販売すると、現地で需要があると判断し、現地の職人にバティックのサンプルを注文して作らせて、ヘルモントに送った。フリスコ社には、1852年、1854年などの年代のついた本物のバティックのサンプルが保管されている。

バティックの技術的特徴は型を用いないロウ防染であり、チャンティンを用いて絵を描くようにロウを布の両面に置いていくことには手間と技術が必要であった。低価格な商品を作るためには、手作業を省力化して大量生産のシステムを作る必要があった。捺染の技術にとって、片面からのみ防染や捺染をするか、あるいは両面からそれらを施すかは、大きな技術的違いになる。

ジャワ・バティックの模様を模すことは、最初は木と銅で作った凸版の型を用いて直接捺染と呼ばれる方法で行われた。カンガの製造も、この方法で行われた。東アフリカ向け、西アフリカ向けの捺染布の製造は、1876年から始まった。その後、1910年頃に凸版のローラー捺染機を使ったワックス・プリンティングが始められた。直接捺染は、布の上に染料や顔料を直接おいて着色する方法であるが、ワックス・プリンティングは防染法的一种であり、ワックス（ロウ）による防染をほどこした後、液体状の染料にに入れて染色し、防染したところには色がつかないで模様とする方法である。ローラー捺染機によるワックス・プリンティングは、表面に模様を刻印した2つの銅製のローラーの間に布を通すことで、布の表面にワックスを付着させ、液体状の染料に浸して染める。すると、ワックスが付着した部分が染まらずに残る。さらに、木や銅で作られた型に染料をつけて直接捺染を重ねると、多色の模様染めができるのである。ワックス・プリンティングが画期的であったのは、片面染めである直接捺染に比べて、本来は両面染めであるジャワ・バティックの模様を、より忠実に模倣することが可能となったからである。このようにして製造されたバティックの模様を模した捺染布は、現地で人気を得て、1920年代までインドネシアに輸出された。このようないわゆる「イミテーション・バティック」をインドネシアに輸出していたのは、フリスコ社に限らなかった。

カンガも含めて、アフリカ向けの製品の製造は1876年にはじまったとされる。両面染めのワックス・プリンティングに比べると、カンガは、片面染めの直接捺染の技術によって製造されており、より廉価な商品であった。西アフリカ向けのワックス・プリンティングの先行研究は、カンガよりも多い[Nielsen 1979; Clarke 1997: 112–128]が、その理由の一つは、ワックス・プリントのほうが、片面の直接捺染によるカンガよりも染色技術として発展しており、染織研究者の関心をより多く引いてきたことが考えられる。フリスコにおけるカンガの製造は1973年に終了したが、片面の直接捺染による西アフリカ向けの捺染布は、「ジャワ・プリント」という名称で、製造が続けられている。

以上、フリスコ社を例にとりあげて、カンガ製造に至る歴史を述べた。このように、オランダのプリント会社は、本来は卓越した職人技術が必要とされ、制作に手間のかかるインドネシアのバティックの模様を、より安価に大量生産できる機械捺染の技術を用いて、アフリカ向けの製品製造

を行ってきた。そのような商品の一つがカンガであった。さらに今回調査した資料は、オランダの捺染会社が、インドや東アフリカにおいてカンガ製造に関わるサンプルを収集していたことを明らかにしてくれた。

6. サンプル帳について

本稿がもとにする資料は、オランダの捺染会社のサンプル帳（オランダ語で *staalboek*、あるいは *stalenboek* ともいう）である。サンプル帳とは、製造会社が製造した商品の一部を切り取って、サンプルとして貼り込んだ帳面である。デザイン帳として工場内で閲覧するものと、販売会社に見せて注文をとるためのものがある。販売会社が現地で収集した他の製造会社のサンプルも貼り込まれているものもある。値段や製造会社、販売会社の記録が細かく書き込まれたものもある。これは、現地でどのような布が好まれているのか情報を集め、商品開発の資料にしたものと見られる。

2011年8月に行った調査では、フリスコ社のアーカイブで108冊と、ロッテルダム世界博物館の収蔵庫で7冊のサンプル帳の調査を行った。フリスコ社のアーカイブには、フリスコ社自身の資料に加えて、ライデン綿布会社、ハーレム綿布会社の資料も所蔵されていた。ロッテルダム世界博物館には、クラーリング綿布会社の資料が所蔵されていた。

調査を行ったサンプル帳115冊のうち、カンガに関わる資料が貼り付けられたものは18冊あり、詳細は以下のようなものである。調査したサンプル帳のうち、フリスコ社の製品のサンプル帳は46冊あり、そのうちカンガのサンプルが貼り付けられていたのは7冊である（表2）。このうち製作年代の判明しているもののうち最も年代の古いものは、1886年であり、最も年代の新しいものは1913年～1917年である。フリスコ社は1876年に火災に遭い、それ以前の資料は消失してしまったということである²⁾。フリスコ社がアフリカ向けの商品の製造を始めたのは1876年ということなので、アフリカ向けの資料に関しては、初期の物もほぼ残されているとみてよい。

クラーリング綿布会社のサンプル帳7冊のうちカンガのサンプルが貼り付けられていたものは4冊である（表3）。最も年代の古い物は1887年であり、最も新しい物は1910年である。ライデン綿布会社のサンプル帳39冊のうちカンガのサンプルが貼り付けられたものは7冊であった（表4）。最も年代の古い物は1884年～1900年であり、最も年代の新しい物は、1908年～1912年のものであった。

本稿では、以上に挙げたフリスコ社、クラーリング綿布会社、ライデン綿布会社の製造したカンガのサンプルが貼付された、1884年～1912年に作成されたサンプル帳18冊をもとに論じる。

表2 フリスコ社サンプル帳のうちカンガのサンプルが貼られていたもの

サンプル帳標題	制作年
Vlisco Slendangs 1886	1886 年
281 Slendangs(O.A.)1891-1892	1891 年 -1892 年
283 Slendangs(O.A.)1906-1916	1906 年 -1916 年
212 Slendangs en Sarongs 1913-1917	1913 年 -1917 年
No.246 Slendangs-Oost Afrika 5590/5880	?
313 Sarongs en Hooddoeken 1-302	?
232 Sarongs en Slendangs(O.A.)	?

表3 クラーリング綿布会社のサンプル帳のうちカンガの貼られていたもの

サンプル帳標題	制作年
71006	1887 年
71005	1899 年
71007	1901 年
71008	1910 年

表4 ライデン綿布会社のサンプル帳のうちカンガの貼られていたもの

サンプル帳標題	制作年
L.K.M. 274 Stalen voor Afrika voor Slendarges etc. 1884-1900	1884 年 -1900 年
L.K.M.1 Stalen Veelal Sarongs O.A. Ook V.VL. EN H.K.M. 1896-1902	1891 年 -1892 年
L.K.M.(260) Stalen Slendangs O.Afrika-H.K.M.V. VL. 1898-1915	1906 年 -1916 年
L.K.M.16 230 Stalen O.A. Sarongs Enr- Zwits-Ned. 1900-1932	1913 年 -1917 年
L.K.M. 9-216 Stalen Khangas-sarongs Echite Batiks. Etc. 1901-1902	1901 年 -1902 年
L.K.M.(309) Stalen V. Slendangs Sarongs Lijmdruk 1907-1911	1907 年 -1911 年
310 Slendangs (O.A.)L.K.M. 7202-7514, 1908-1912	1908 年 -1912 年

7. ボンベイで収集された染織品サンプル

オランダでの調査によって新たに発見された資料を検討する。まず、ボンベイで収集されたと記載された資料について検討する。

ヨーロッパ製の機械捺染によるカンガが製造される以前の初期のカンガ製造・販売について、インド商人の関わりや、木版捺染で製造されていたなどの指摘があったものの、それを明確に示す染織資料がなかったために判明しないことが多かったと冒頭で述べた。ボンベイで収集されたサンプルが貼り込まれていたのは、「ライデン綿布会社 9(216) カンガ、サロン、本物のパティックなどのパターン1901年～1902年 (L.K.M.9(216) Stalen Khangas-Sarongs Echite Batiks-Etc. 1901-1902)」と記されたサンプル帳である。このなかに、ボンベイで収集されたという記載のあるサンプルは20点ある。

ボンベイで収集された染織品資料のなかに、ザンジバル向けにボンベイで製造された旨が記された絞り染め布、絞り染め模様の捺染布を見いだした。それに加えて、絞り染めに由来するデザインのおランダ製カンガを見つけた。これによって、オランダにおいて、インド染織品のデザインを模

倣したカンガが製造されていたことを明らかにすることができると考える。

資料1は、絞り染め技法で染色されたサンプルであり、ザンジバルむけにボンベイで製造されたと記されているものである（写真1）。大きさは、縦48センチメートル、横31.5センチメートルに切断されている。サンプルの添付された上部には、次のような記載がある。

「ボンベイ・クロス

1.5 ルピー

ザンジバルむけ 8月20日、1901年

観察1 中央部分がたたまれて括られている

観察2 糸が残っている」

このサンプルが絞り染め技法で染められていることが分かるのは、布を糸で括ったあとが布のしぼとなって残っていること（写真2）、また括り糸が残っているからである（写真3）。この種の絞り染め布は、グジャラートやカッチ地方で制作され、女性の被り布として着用されてきた。グジャラートやカッチ出身者を通してボンベイでも生産、消費されている。当該地方の絞り染めの特徴は、色づかいと模様にもられる。このサンプルは、白地に赤色と黒色の染め分けで、括りによる白色の斑点模様である。サンプルの下部はボーダーであり、また右上にみられる模様は、切り取られる前はゴル（円）と呼ばれる模様の一部である。ゴルは、円形の模様で、その中央部分にはマンゴーや花、三角などの幾何学文様が配置されていることが多い。生地は木綿布で、インチあたりの経密度は60、緯密度は60、糸はZ撚りである。染料は合成染料である。

資料2は、資料1と同様、ザンジバルむけにボンベイで製造されたサンプルであり、類似のデザインのものである（写真4）。資料1と異なるのは、絞り染めではなく、木版捺染で染色されていることである。生地は木綿布で、経密度は60、緯密度は70、糸はZ撚りである。染料は合成染料である。サンプルが添付されている紙の上部に、以下のような記載がある。

「ボンベイ・クロス

おそらく D.O.A.G. のオリジナルのサンプルである。

ザンジバル向け、8月20日、1901年

12 アンナ」

資料2が、木版捺染で染色されていることがわかるのは、木版による印捺のあとが、木版の区切れで示されているためである（写真4に記された線①と線②）。また、ボーダーのところは、文様がななめに区切れていることから判明する（写真4に記された線③）。これは、四方形の木版を角に

押したときに文様が重ならないように、紙などをななめに置いてから、それぞれの角を印捺したところからうまれる区切りである。このような角部分における印捺の処理は、現在でもカッチ地方で観察される方法である。

色づかいと模様の特徴は、資料2と類似する。ボーダーとゴル（円）模様がある点は、資料1と同じである。また、白地に黒色と赤色の染め分けであることは資料1と同じであるが、斑点模様は赤色である点が異なる。資料2の染色方法は、おそらく、白生地 of ボーダーとゴル模様部分を赤色に染色し、凸版の木版を用いて黒色になる模様部分に薬剤を印捺して天日干しするという方法がとられたと考える。薬剤を印捺した部分が黒色に変色し、白地に赤色と黒色に染め分けられたのである³⁾。

インド西部では、資料2のように、絞り染め布のデザインを捺染によって模倣することが行われており、資料1のような絞り染め布と同様、女性の被り布として用いられた。

カンガのデザインにインド西部の絞り染め布のデザインがとりいれられていることは、すでに〔金谷 2006、出版予定〕で論じたが、このサンプル帳の中にも、インド西部の絞り染め模様を模倣したカンガのサンプルを6点見つけることができた。残念なことに、これらには収集場所、製造場所などについての情報が全く書かれていない。しかし、これらがインドで製造されたものではなく、オランダで製造されたと筆者がみなす理由がある。それは、模様を捺染した木版の大きさである。6点の資料のうち、2点を例に論じたい。

資料3（写真5）は、大きさが縦50.5センチメートル、横32.0センチメートルであり、木綿布でインチあたりの経密度が50、緯密度が50、糸はZ撚りである。染料は合成染料である。ボンベイで製造された資料2と同じほぼ同じ模様である。ボーダーとゴル（円）模様があること、白地に赤色と黒色の染め分け、赤色の斑点模様などが共通点である。とくにボーダーとゴル模様にある特徴的なマンゴー模様は、そっくりといってもよいほどよく似ている。

違いは、模様を印捺するのに用いられた凸版の木版の大きさである。資料3は、版の継ぎ目がボーダー右上にしかみあたらない（写真5の線④）。模様の継ぎ目を木版の継ぎ目とすると、木版の大きさは縦が42.5センチメートル、横が32センチメートル程度と推測することができる。このサイズの木版は、インド西部で使用されているものに比べて大きい。一方で、フリスコ社で使用されていたオランダ製のカンガ用木版のサイズに近似する。

フリスコ社で使用されていた凸版の木版は、木型にフェルトを張り付けたもので、大きさは縦39.5センチメートル、横27センチメートル、厚さが5センチメートル（うち刻印の部分の深さが0.5センチメートル）である。先述したように、カンガは直接捺染で染色されており、ローラータイプの捺染機械が導入されるまで、木版を用いて製造されていた。

ボンベイで製造された資料1は、ボーダーの角部分に版の継ぎ目があり、資料3に比べると明らかに木版のサイズが小さい。サイズが計測可能なのは、線（写真4の線②）で示した個所で、推定

される木版の縦幅が12センチメートル前後である。このサイズは、筆者がこれまでインド西部の調査地で観察してきた木版のサイズと矛盾しない。

以上述べたように、木版の大きさの違いから、資料3はオランダ製のカンガであると筆者はみなしたい。つまり、ボンベイで収集されたザンジバルむけのインド製サンプルと、模様やデザイン構成が類似するカンガが、オランダで製造されていたということである。そのことが示すのは、オランダの捺染会社は、インドで収集した染織品を、カンガを製造する際のデザイン・リソースとして活用していたということである。

8. おわりに

カンガは、インド、オランダなどヨーロッパ、東アフリカの3つの極を舞台にした国際関係のなかで生まれたということが明らかになった。染織品は、けっして染織研究にのみとどまるものではない。インド染織品はグローバル商品であり、国際関係論のなかで論じられるべき対象である。

当時オランダは、東南アジア、インド、アフリカなど布の販売先である地域において、現地の人々がどのような布を好み、使用しているのかについて市場調査をおこない、それぞれの地域の住民の好みと需要に合致した布を生産、販売していた。ヨーロッパ各地の繊維業関係の会社のなかには、市場調査のために蒐集された土着の布の見本や、工場において生産された布の見本が保存されているところがあることが明らかになった。

筆者はこれまで、インド西部で染色を生業とする職能集団の文化人類学的な研究を行っており、彼らが制作する染織品が、地域に埋め込まれた意味や用途、また交換価値をもっていることを明らかにしてきた〔金谷2007〕。それと同時に、職人達に話を聞く中で、彼らが染色という仕事を通して海を越えたアラブ世界やアフリカ世界ともつながってきたことを見聞しており、いつか彼らのグローバルな活躍を研究としてかたちにしたいと思ってきた。本稿は、幸いにも、貴重な資料にめぐりあえたことでその一端にとりかかることができたものである。

カンガは、先行研究が主に扱ってきた貴重財としての染織品とは異なり、近代化のなかで拡大する消費需要に応えた染織品である。このような大量生産された染織品についての研究はまだ少ない。カンガについても同様に、アフリカのワックス・プリンティングと比較しても、染織資料に基づいた実証的な研究は少なく、まだ研究の余地は多く残されている。

19世紀のインドにとって、東アフリカは経済的に重要な地であった。インド西部から東アフリカには木綿布が大量に商品として輸出されていたことが明らかにされており、特に1800年～1840年代には、カッチ地方のマンドヴィー港からインド産の木綿布が東アフリカに輸出され、1860年代からはボンベイの繊維工場が生産した未精練の木綿布が東アフリカ市場に輸出された。ボンベイにおける東アフリカ向けの綿布生産が、インド洋におけるボンベイの中心的地位の確立の一助となったと評価する研究者もいる。カンガの誕生も、このようなインドの経済史と関係づけて考察するべきである。

カンガは、19世紀末のザンジバルにおいて、解放された奴隷が、自由な市民としての社会的地位を獲得するために選んだ衣服として、突如歴史の舞台に現れた。大判のカラフルな木綿布であるカンガは、東アフリカの近代的な都市のファッショナブルな住民に歓迎された。初期カンガは、インドやザンジバルで捺染された木綿布だと言われているが、明確なことは明らかになっていなかった。19世紀末から20世紀前半にかけて、カンガは、スイス、オランダ、英国の捺染会社によって捺染の方法で大量生産され、東アフリカの市場に輸出された。カンガの誕生からヨーロッパの会社が製造するあいだについては、これまで資料の制約もあり、研究はほとんどなされていなかった。

今回、オランダの捺染会社が製作したサンプル帳の調査から、これまで空白だった期間に関わる新資料が発見された。調査から得られたのは、①英領インドで収集された染織品のサンプル、②東アフリカで収集された木版捺染のサンプル、③英領インドで収集された染織品や東アフリカで収集されたカンガのサンプルと類似するデザインの、オランダの捺染会社によって製造されたカンガのサンプルという3種類の資料である。このうち、本稿では、紙面の都合から論じることのできなかった東アフリカで収集された木版捺染のサンプルについては稿を改めて論じたい。

オランダの捺染会社は、本来は卓越した職人技術が必要とされ、制作に手間のかかるインドネシアのバティックを、より安価に大量生産できる捺染という技術を発展させることでデザインの模倣を可能にし、インドネシアや西アフリカ市場にむけて製造したことが先行研究から明らかになっている。オランダの捺染会社は、東アフリカ向けに関しても同様に、現地で流通している染織品を収集して、そのデザインを模倣して生産したということが、資料から明らかになった。

捺染という技術の発達には、染織や服飾の領域と意味を変えてしまったと筆者は考えている。従来は、布に多色の色をつけたり、模様をつけたりするには複雑な技術と手間がかかったために、そのような布は貴重で、特定の社会階層に属する人々にのみ所有されるものであった。そのような特別な布の表層デザインを模倣して、多くの人にひらいたのが、捺染という技術であった。ヨーロッパにおいて機械化にすすんだ捺染の技術の発達は、17世紀にさかのぼるインド染織品のヨーロッパへの流入が契機となり、木綿布の大量生産、合成染料の発明があつて、ますます進展した。

日本ではアメリカン・ファッションの服飾小物として紹介されたバンダナというハンカチーフは、実はその起源がインドの絞り染めによる斑点模様の布であった [Bean 1999]。18世紀末にヨーロッパでバンダナ・ハンカチーフとして流行し、さらにアメリカで捺染による多様なデザインのバンダナとして展開したのも、グローバルな商品流通の中で、インドの染織品が模倣されて、捺染技術や木綿布の大量生産、合成染料の発展を背景に、大衆ファッションを生み出した事例である。

機械化された捺染技術がインドに還流したことが、インドの染織技術と服飾文化を容容させている。現在のグジャラート州は、機械化された捺染産業の産地の一つである。伝統的な染色職能集団のなかには、手仕事の染色から、機械化された染色に転換したところが多い。多くは、国内向けの合成繊維素材のサリーや服生地 of 捺染である。カッチ地方では、独特の民族衣装を保持している集

団がいるが、そのような衣装も、よくみるとデザインは従来のものであっても、合成繊維素材に捺染されたものであることが多くなっている。

また、グジャラートでは、興味深いことに、1980年代頃から改めて東アフリカ市場向けのカンガの生産が行われるようになっていく。木版捺染ではなく、手動スクリーン捺染や、自動スクリーン捺染によるものである。グジャラートの地元市場では、アフリカ向け捺染布のはぎれが出回っており、夜具用キルトの素材に利用して仕立てたものを筆者は見、驚いたことがある。

インドから発してアフリカ向けにアレンジされたデザインが、再びインドに戻ってきて、日常的に使用する衣服や寝具のデザインを変容させていくのかもしれない。

謝辞

本稿は、口頭発表「アフリカのカンガ布にすりこまれるインドのイメージ」国際ワークショップ『捨てられるもの 捨てられないもの：布の履歴からモノの消費を考える』国立民族学博物館（2012年2月8日）を元にしていく。本研究は、文部科学省科学研究費「アジア、ヨーロッパ、アフリカに関わるテキスタイル・グローバリゼーションの研究」（研究番号 23520203、吉本忍代表）によって可能となった。原稿を読んだ的確なコメントをくださった匿名の査読者と上羽陽子氏に感謝したい。

註

- 1) オランダ、スイス、英国のプリント会社のサンプル帳の存在は、2006年に行われた国立民族学博物館の特別展覧会『更紗今昔物語』のために吉本忍氏が行った調査において見いだされた。展覧会に関わった筆者は、その調査データの中に、インド染織品に関わる資料を見つけることができた。
- 2) Museum P. F. van Vliissingen のコンサバター、Mr. R. A. H. Sanders の教示による。
- 3) この染色方法に関する情報は、筆者が2010年2月にカッチ地方における聞き取り調査によって得たものである。赤色の染料はナフトール染料、天日干しによって黒色に変色する薬剤は、現地では「パトリ」と呼ばれていた。

参考文献

- 内田星美、2007、「染色加工」、日本産業技術史学会（編）『日本産業技術史事典』思文閣出版、372–373頁。
- 小笠原小枝、2008、「彦根更紗をめぐる」、『古渡り更紗』、五島美術館、14–18頁。
- 金谷美和、2006、「カンガ—東アフリカと西インドをつなぐプリント更紗」、『更紗今昔物語—ジャワから世界へ』、国立民族学博物館、78–80頁。
- 、2007、『布がつくる社会関係—インド絞り染め布とムスリム職人の民族誌』、思文閣出版。
- 、出版予定、「移動する布—インド、アフリカ、ヨーロッパをつなぐフェティシズム」、田中雅一（編）『フェティシズム研究の射程—第2巻』、京都大学出版会。

- 日本学術振興会繊維・高分子機能加工第120委員会（編）、1999、『染色加工の事典』、朝倉書店。
- ルミア、ベヴリ、2006、「インド綿貿易とファッションの形成、1300～1800年」『社会経済史学』、第72巻第3号、41-61頁。
- レヴィ＝ストロース、モニク、1988、『カシミア・ショールー歴史とデザイン』、深井晃子（監修）、平凡社。
- 吉本忍編、1996、『知られざるインド更紗—南海の島々インドネシアにおける発見』、京都書院。
- 、2006a、「アフリカとアジアに見る現代のプリント更紗」、吉本忍（編）『更紗今昔物語—ジャワから世界へ』、国立民族学博物館、34-53頁。
- 、2006b、「ジャワ更紗を模倣した近代のプリント更紗」、吉本忍（編）『更紗今昔物語—ジャワから世界へ』、国立民族学博物館、16-33頁。
- Barnes, Ruth, 1997, *Indian Block-printed Textiles in Egypt. The Newberry Collection in the Ashmolean Museum, Oxford*, Oxford: Clarendon Press.
- Barnes, Ruth (ed.), 2004, *Textiles in Indian Ocean Societies*, London and New York: Routledge Curzon Press.
- Bean, Susan, 1999, “The Indian Origins of the bandanna,” *The magazine antiques*, 156-6, pp. 832-839.
- Clarke, Duncan, 1997, *The Art of African Textiles*, California: Thunder Bay Press.
- Crill, Rosemary (ed.), 2006, *Textiles From India: The Global Trade*, Calcutta, London, New York: Seagull Books.
- Faber, Paul, 2010, *Long Live the President!: Portrait-cloth from Africa*, Amsterdam: KIT Publishers.
- Fair, Laura, 1998, “Dressing up: clothing, class and gender in post-abolition Zanzibar,” *Journal of African history*, 39-1, pp. 63-94.
- Gittinger, Mattiebelle, 1982, *Master Dyers to the World*, Washington, D.C: The Textile Museum.
- Guy, John, 1998, *Woven Cargoes—Indian Textiles in the East*. London: Thames and Hudson.
- Hilger, Julia, 1995, “The Kanga: An Example of East African Textile Design,” John Picton (ed.) *The Art of African Textiles: Technology, Tradition and Lurex*, London: Barbican Art Gallery and Lund Hunphries Publishers, pp. 44-45.
- Irwin, John, 1955 [1996], “Indian Textile Trade in the Seventeenth Century,” *Journal of Indian Textile History*, Ahmedabad: Calico Museum of Textiles, pp. 5-30.
- Irwin, John and R.P. Schwartz, 1966, *Indo-European Textile History*, Ahmedabad: Calico Museum of Textiles.
- Linnebuhr, Elisabeth, 1992, “Kanga: Popular Cloths with Messages,” in Werner Graebner (ed.), *Sokomoko: Popular Culture in East Africa*, Matatu, Number 9, pp. 81-91.
- Lemire, Beverly, 2003, “Domesticating the Exotic: Floral Culture and the East India Calico Trade with

- England, c.1600–1800,” *Textile* 1-1, pp. 66–85.
- Murphy, Veronica and Rosemary Crill, 1991, *Tie-Dyed Textiles of India: Tradition and Trade*, London: Victoria and Albert Museum, Mapin Publishing Pt. Ltd.
- Nielsen, Ruth, 1979, “The History and Development of Wax-printed Textiles Intended for West Africa and Zaire,” in Justine M. Cordwell and Ronald A. Schwarz (eds.), *The Fabrics of Culture: The Anthropology of Clothing and Adornment*, The Hague: Mouton Publishers.
- Parkin, David, 2005, “Textile as Commodity, dress as text: Swahili kanga and women’s statements,” in Ruth Barnes (ed.), *Textiles in Indian Ocean Societies*, London and New York: Routledge Curzon.
- Postans, Marianna, 1839, *Cutch: or random Sketches, Western India with legend and Traditions*, London: Smith, Elder and CO. Cornhill.
- Prestholdt, Jeremy, 2008, *Domesticating the World: African Consumerism and the Genealogies of Globalization*, Berkeley: University of California Press.
- Spencer, Anne M., 1982, *In Praise of Heroes: Contemporary African Commemorative Cloth*, Newark: The Newark Museum.
- Wuff, Hans E., 1966, *The Traditional Crafts of Persia: Their Development, Technology, and Influence on Eastern and Western Civilizations*, Cambridge: The M.I.T. Press.
- Zawawi, Sharifa, 2005, *Kanga: The Cloth That Speaks*, New York: Azaniya Hills Press.



写真1 (資料1)



写真2 (資料1)



写真3 (資料1)



写真4 (資料2)



写真5 (資料3)